マダイが底にいるのは間違いない。
でも宙を泳いでるヤツも
いるはずなんだよね。

◉小さなアタリをとらえて合わせも決まり、しっかりハリ掛かりしたかに思えたが巻き上げ途中でバレてしまう

▶水深30メートルのポイントでは8号テンヤを結ぶ

▲滑らかな巻き心地で巻き上げ力のあるベイトリールが使いやすい

めてアタリが多い。だからつい、底付近をネチネチと攻めガチである。

その一方で取材前の週末に弘漁丸で釣れた4.8キロのように、大物ほど意外と上のほうで食ってくるものなのだ。

だが、いざ宙層を攻めるとなると、かなりの精神力が求められる。海底のように何か取っかかりがある場所にエサを踊らせるのと、宙層のように何もない場所でエサを踊らせるのとでは、竿を握る側の気の持ちようがだいぶ違う。そして実際のところ、アタリの数も底のほうがずっと多い。

宙層の釣りは、まさに雲をつかむよう。とらえどころ、よりどころといった基点がなく、しかもアタリが少ないとくれば、どうにも心が保ちにくいのだ。

しかしヨッシーは強い気持ちの持ち主である。「絶対に良型マダイを釣る！」という強固な意思で、宙層の釣りにこだわり続けている。このあたりは、さすがプロと言わざるを得ない。

イルカの大群で盛り上がり、いよいよ本命の気配が濃厚に

その横で、底の釣りにこだわり続けているのが、ライターのタカハシゴーであった。

「最初のうちは、底から2メートルぐらいまで狙ってたんだよ」とタカハシゴー。一つテンヤマダイの基本である、着底～竿をいっぱいにシャクり上げる～ゆっくりと再着底、という動作を繰り返していた、と主張する。

しかし、上のほうではまったくアタリがないこと、そしてあまりに寒くて身が縮こまり、大きな動作をしたくないことから、底から50センチ程度をネチネチと探る釣りをしていた。

「あっ……！」

鋭い合わせを見せたのは、タカハシゴーその人であった。それまでさんざん「寒い」「冷たい」「眠い」とボヤいていた彼が、まったく別人のような満面の笑みを浮かべている。

カン！　カカカン！

竿先をたたくような硬質なアタリに、本命のマダイであることを確信しているようだ。

「ちょっとちょっと、ゴーさん、それマダイじゃないの!?」

さすがにヨッシーが取材班側に振り返りながら声を上げる。

「う、うーん、どうかなあ」

内心では「これぜってぇマダイだ」と思っているが、ハズレていたら恥ずかしいのでそうは言わないタカハシゴーである。

ほどなくして海面が美しい桜色に染まった。500グラム級、食べごろサイズのマダイだ。

「やった、やった！　オレの役目はこれで終わりだ！」とタカハシゴー。

取材釣行というのはなかなかにプレッシャーがかかるものである。万一本命が顔を出さなかったら、再ロケとなる。日程調整を含め、色いろと難題がのしかかるのである。

とりあえず本命の写真を一発でも押さえられれば、取材が成立してページが埋まる可能性が高まる。

……あくまでも可能性、であ

▲マダイの船中第一号はタカハシゴー